はしがき

京都大学東南アジア研究センターでは，昭和50年以来，5年をめどに，所員の論文集を編纂し，これを「東南アジア研究叢書」の一冊として出版してきた．本書はその3冊目にあたる．昭和40年に創立されたセンターは，本年度に20周年を迎えた．したがって，本論文集は，ようやく成人の年齢に達した東南アジア研究センターを記念する出版でもある．

過去5年間，東南アジア研究センターでは，「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」という学際的共同研究をおこなってきた．人文・社会・自然の各系に所属する研究者たちが，それぞれ専門を異にする同僚たちとともにフィールドにでかけ，はげしい議論を戦わせながら進めてきたこうした知的営為のなかからいくつもの仮説が生まれた．その仮説のいくつかは，本書に収録された論文のあちこちに示されている．

20年前，センターを生みおとしてくれた諸先輩が期待したことは，外国人の書いた文献のみをよりどころにしていた当時の研究状況を，フィールドワークという方法の導入によって克服し，自らの手で一次資料を掘りおこし，自らの目でこれを分析してみせる力量を備えた研究者の誕生であった．初期のセンターの業績のなかに，すぐれて事実主義的な傾向が見出されるのは，センターをめぐるこうした初期の事情が反映しているといえるだろう．そうしたセンターの学風を予想する読者は，本論文集に含まれたいくつかの論文のもつ仮説性の強さに，いささかのとまどいを覚えられるかもしれない．これは20年の研究史を背景に，新たな飛躍を試みようとする東南アジア研究センターの，助走の響きとお読みいただければ幸甚である．

当時の所長として前2巻の論文集を編集された市村真一，渡部忠世両教授は，「はしがき」のなかで，読者のなかから，アジア研究を志す若き学究が輩出することを切望されている．過去20年の間に，たしかに，日本の東南アジア研

究の状況は大きく変化し，すぐれた人材が，かつては見向きもされなかった東南アジア研究に参入し，東南アジアをそのフィールドとする学問研究に若い情熱をたぎらせるようになったことはうれしいかぎりである．しかし，学問はたゆむことなく前進を続けて止まることを知らない．この書物が，新しい東南アジア研究者の出現にいささかなりとも貢献することができるならば，編者の喜びこれに過ぐるものはないのである．

おわりに，過去20年にわたって，センターの成長を暖かく見守り，その研究活動を支えて下さった諸先輩と，かつての同僚諸氏に深い感謝を捧げるとともに，つぎの20年に向ってあらたなる飛躍を目差そうとしているセンターを，さらに御支援を下さるようこころよりお願いする次第である．

1985年12月

京都大学東南アジア
研究センター所長
石井米雄